



目次	
●副会長あいさつ	1
●関プロ新潟大会報告	2～4
●特集	5
●郡市教頭会ネットワーク	6
●教育懇談会報告	6～7
●随想	8



## 「目の前にいる子どもたちが未来を創る ～ONE TEAMで邁進を～」

新潟県小中学校教頭会

副会長 **竹垣 雅彦**

(長岡市立表町小学校)

平成から令和へと元号が変わった「令和元年度」も残すところ、あと1か月となってきました。

今年度は、11月7日(木)、8日(金)に第60回関東甲信越地区公立学校教頭会研究大会新潟大会を会員の皆様のご協力により開催し、大きな成果を上げることができました。心から感謝申し上げます。特に、新潟市の教頭先生方には、会場設営や交通機関に至るまできめ細やかな準備を進めていただきました。また、各郡市の教頭会では、研究主題「豊かな人間性と創造性を育み未来を拓く学校教育～主体的に学び、たくましく生き抜く子どもを育む学校づくり～」に基づいて研究を進めていただきました。今回の提言は、会員の皆様が自校に持ち帰った際、即活用でき、子どもたちのためになるものであることを確信しております。大変ありがとうございました。

さて、令和元年の流行語大賞は、ラグビーワールドカップ2019で話題となった「ONE TEAM」でした。

自分よりも大きな相手に対しても臆することなくタックルをしてボールを奪う姿。自分の与えられた役割を確実にこなし、チームに貢献する姿。仲間を信じ、一人一人の選手が必死にボールをつなぎ、トライを目指す姿。そして、ノーサイドになると、敵、味方関係なく互いの健闘を称え合うすがすがしさ。そのひたむきな姿から、多くの感動をもらったという方もいらっしゃるかと思います。

また、教育現場と重ね合わせて見られた方もいらっしゃるのではないのでしょうか。「全教職員がすべて

の子どもの担任である」という意識のもと、チームで一丸となって、一人一人の子どもに接し、悩みや課題を親身に寄り添い成長をとともに見守る姿は、まさにラグビーワールドカップで活躍した選手と相通じるものがあつたのではないかと思います。

ラグビーでいうところの教頭としての皆様のポジションはどこでしょうか？フォワード、バックス、スタンドオフ…監督等。学校の職員構成、学校事情等、様々な受け止め方はあると思いますが、全員で助け合い、チームとして成果を上げられる形を考えていくことが重要となってくると思います。

いよいよ小学校においては、この4月より、中学校においては令和3年度より新学習指導要領の全面实施となります。各学校では、その円滑な実施に向けて準備を全校体制で進めていることと推察します。今回の改訂では、「社会に開かれた教育課程」において、学校と社会が連携・協働して、すべての子どもたちに、よりよい社会や人生を切り拓く資質能力を育成することが示されました。

人工知能(AI)の進歩、IoTの広がり、ビッグデータ解析等の先端技術の高度化により、社会の在り方そのものが劇的に変わるとされるSociety5.0時代の到来が予想されています。急激な社会的変化が進む中でも、子どもたちが変化を前向きに受け止め、未来社会を生き抜く力を育むために、新しい時代の学校づくりが求められています。今、目の前にいる子どもたちが、未来を創ることを全教職員で強く受け止め、全校体制で子ども一人一人の可能性を信じ、資質・能力を伸ばしていきたいものです。

# 関ブロ新潟大会報告



## 関ブロ副実行委員長あいさつ

新潟市小学校教頭会

平出 靖  
(新潟市立東青山小学校)

3年間の準備期間を経て開催された第60回関東甲信越地区公立学校教頭会研究大会新潟大会が県内の教頭先生方、ご指導いただいた助言者の皆様、ご支援いただいた関係機関の皆様のおかげで成功裡に終わられましたこと、実行委員を代表してまずもって感謝申し上げます。

大会には関東甲信越ブロックの1,563名の副校長・教頭先生方が参加されました。

1日目は新潟市民芸術文化会館りゅーとぴあにて全体会と講演会が行われました。

記念講演では天文イラストレーター・天体写真家の沼澤茂美様から、演題「驚異の天文現象～人生観を変える～」について、美しく貴重で、なおかつ大迫力の映像や写真をふんだんに使いながら、その時々撮影の様子など裏話も交えて楽しく話していただきました。天体に疎い私でもぐっと引き込まれ、自然の迫りに圧倒された90分でした。

参加者からは「あっという間に時間が過ぎた。」「また聞きたい。」「天体の神秘に感動した。」「幻想的な映像に心が癒やされた。」などの感想が多く寄せられました。

2日目は市内9会場で12の分科会が行われました。分科会では研究主題「豊かな人間性と創造性を育み未来を拓く学校教育～主体的に学び、たくましく生き抜く子どもを育む学校づくり(3年次)～」の下、各県で研究されてきた県外12、県内12、計24の提言が発表されました。

これらの提言は、教育の世界でずっと大事にされてきた不易のもの、現代の喫緊の課題に即したもの、時代を先取りした一歩先を進んでいるもの等々、バラエティに富んだものでした。

それぞれの分科会で、提言者の研究内容を聞き、グループ討議で学校文化が違う他県の方たちの考えを聞いたり、意見交換を行ったりしたことで、これ

までの自分にはなかった視点を得ることができました。

右の数字は大会のアンケート結果です。どの項目もとても高い評価をいただきました。この結果は、それぞれの担当実行委員の皆さんがこれまで綿密な準備をし、本番で臨機応変に動いてくださった

肯定的評価	
開会式	90.6%
講演会	92.8%
分科会運営	98.8%
分科会の内容	98.0%
グループ協議	97.6%

からこそ得られたものです。実行委員の一人として3年間の苦勞が報われうれしく思います。

しかし、「いい研究会ができてよかった。」で満足してはいられません。ここで留まってはいただけません。肝要なのは私たち教頭がこの大会で学んだことを、それぞれの学校でどう活かすかです。

私たち一人一人が今回得た成果を基に行動を起こし、職員集団を動かすことで、自分の学校をよりよい方向に変えていくのです。そして、その結果、新潟県の子どもたちが「主体的に学び、たくましく生き抜く力」を身に付けたときに「真の大会成功！」と言えるのではないのでしょうか。

これからも、新潟県の子どもたちのために教頭同士の横のつながりを強固にしていきたいと思います。

2日間で県外の方々から「お弁当おいしかったです。」「昨日は日本酒飲み過ぎました。」という声をたくさん聞くことができました。米どころ、酒どころ新潟の面目躍如だったこと、そして、その陰には主管をした新潟市小中学校教頭会全員のおもてなしの心があったことを最後にお伝えしてこの稿を締めたいと思います。

新潟大会に関係したすべての皆様、本当にありがとうございました。



# 関ブロ新潟大会報告



## 仲間と共に 創り上げた実践

南魚沼郡市教頭会

佐藤 典人

(湯沢町立湯沢中学校)

はじめに、関ブロでの発表機会をいただけたことに感謝したい。自己実践の発表ではあったが、「現職場の教職員と共に積み上げた実践を、発表することができた」からである。いや、発表できたと言うより「現職場の教職員と共に創った実践を、記録として残せた」ことが嬉しい。

新任教頭の私は本発表を通して、「教職員の育成」と「働き方改革（時間活用法）」を柱とし、教職員集団づくりに取り組んだ。その具現化の手段として「新任教頭研修で得た知見とレポート（戦略シート）」に、「教諭20年間の自己実践を、管理職の立場で活用できるようにバージョンアップさせる」方法を用いた。自治的な学級集団を創るべく、自治的な教職員集団を創る。そんな実践を通して、教職員が成長する姿が見えるたびに胸が熱くなり、「負けてられないぞ！」と気合いを入れながら、教職員と一緒に活動することを楽しんだ。まさに本発表は現職場の仲間と一緒に作り上げた実践である。

本発表を通して、2つの学びを得た。1つは、仕事にも「学びの連続性」があること。初担任を終えた後の虚無感、学級崩壊で途方に暮れた日。挫折から自分がこの世界で力を発揮するため、自己の弱さと正対しながら実践に理論を付加し、仕事にのめり込んだ日々。様々な体験を通して確立してきた自己実践に意味があったこと、それらを一般化すれば教職員を育てるツールとなること等、これまでの仕事全てが繋がっており、「毎日の仕事＝学びの連続」であることを再認識できた。もう1つは、管理職も教諭時代と同じ体験ができるということ。教務室（教職員）の担任（教頭）として、教職員の成長が感動体験や仕事へのやりがいに繋がっていることに気づけた。

教頭としての挑戦は始まったばかりである。学びの連続性を意識し、教職員を育てることで子ども達を育て、活気溢れる学校づくりに挑戦し続けたい。次の実践発表の機会を楽しみにしながら…。



## 関ブロ新潟大会を 終えて

燕市西蒲原郡小中学校教頭会

山口 智

(燕市立燕北中学校)

3年前、私が燕市に赴任した時、燕市西蒲原郡教頭会では、「メンターメンティ方式によるOJT」の取組の方向性は既に決まっていた。最も重要な土台づくりはでき上がっていたのである。

間もなく私が提言者に抜擢されるのだが、計画がしっかりできていたため、計画に沿って活動する中で、研修内容が整理されていった。

メンターメンティの組み方も、はじめは1対1で1年間継続して行う方式を考えていたが、それだけでなく、1対多数の講義形式でのOJTや、必要な時に必要なメンターとメンティが組まれてのOJTなど、3つのOJTパターンに分類することができた。その後も、教頭会で、有効な事例を紹介し合ったり、課題を出し合ったりと情報交換を行った。

そこから見えてきた成果や課題から改善策を考え、実践を繰り返した。例えば、OJTの理解を深めるため、外部講師を招聘し講演会を行った。また、リーフレットを作成し各学校へ配付することで広く取組の周知を図った。

発表に向け、教頭会理事会でリハーサルをし、修正したものを教頭会全体で発表することを繰り返し、内容を吟味していった。こうした一連の活動を通して、自分一人の取組ではなく、燕市西蒲原郡教頭会全体で取り組んでいることが実感でき心強く感じた。当日の発表では、いくつかの質問があった。それらは今後の取組の手掛かりとなった。また、助言者である中越教育事務所笠原道宏様から、3年間私たちが取り組んできた内容をいろいろな資料を基に意味づけをしていただいた。私たちの取組の有効性が再確認できた。

今回、燕市西蒲原郡教頭会全体での取組により、研修を深められたことはもちろん、教頭同士のつながりが校種を超えて強固になることが実感できた。このような発表の機会を与えていただいたことに深く感謝している。

# 関ブロ新潟大会報告



## 大きな学びの 機会を得て

新潟市小学校教頭会

柴澤明子

(新潟市立荻川小学校)

関ブロ新潟大会では、第5 A分科会「教職員の専門性に関する課題」について発表しました。これまで教職員の性格や経験に任せることが多く、育成することが困難であると捉えていた「共感力」を、どのように向上させることができるのかというテーマで提言しました。

発表を終え、この新潟大会で得た新たな学びや気付きについて、以下に述べます。

### 1 新潟市の取組「支持的風土の醸成」との関連

新潟市教育委員会学校支援課指導主事佐藤貴子様から、新潟市が取り組んでいる「支持的風土の醸成」の中核を成す「傾聴・受容」が提言にある「共感力」であり、教師が「共感力」を示すことで子ども同士が共感力を発揮し、支持的風土が醸成されていく、だからこそ今回の「共感力の向上」というテーマは重要であるというご指導をいただきました。今後もより一層、力を入れて取り組んでいくべき研究テーマであることが分かりました。

### 2 教頭会の意義

新潟市秋葉区教頭会では、毎月、各学校での問題事例や解決事案の過程を報告しています。そして、より良い対応策や解決方法について、先生方の知見に基づいて、熱心に意見を交わしてきました。

今回の研究テーマも、これまでの教頭会での話合いの成果をまとめたものです。月に一度、困り感を共有し合い、解決に向け励まし合ってきたことで、実際の解決へと導かれただけでなく、教頭会が自分自身の大きな心の支えになっていたことに改めて気付くことができました。

最後に、大きな学びの機会を与えていただきましたこと、また大会を運営してくださいました実行委員会の皆様に心から感謝を申し上げます。本当にありがとうございました。



## 次代を担う 子どもたちのために

佐渡市小中学校教頭会

櫻井雅之

(佐渡市立金井中学校)

第60回関東甲信越地区公立学校教頭会研究大会新潟大会第2分科会「子どもの発達に関する課題」において、佐渡市中学校教頭会を代表して提言させていただきます。

佐渡市では、少子高齢化や人口減少の影響による市内総生産の減少が喫緊の課題となっています。これらの課題解決のため、佐渡市教育振興基本計画では「佐渡を知り、愛し、誇りとするキャリア教育」を標榜し、具体的取組が提示されました。

佐渡市中学校教頭会では、その具体的取組をより効果的に行い、生徒のキャリア発達を促す研究を進めてきました。そして、教頭の関わりを「知らせる」「支える」「育てる」「つなぎ広げる」の観点から、PDCAサイクルで継続的に改善を行ってきました。

本研究では、「知らせる」関わりとしてキャリア教育に関する職員研修の設定と各中学校の取組状況の成果と課題の伝達を、「支える」関わりとして外部関係機関等との連絡調整サポートと学習活動推進の主体となる学年部への指導や支援について提言しました。また、「育てる」関わりとして各教科領域の指導計画の改善と授業改善の推進支援を、「つなぎ広げる」関わりとして市教委や中学校区での連携の取組を提言しました。協議会では、持続可能な連携・協働体制の構築、校内体制の構築における人材育成について、様々な意見交換がなされました。生徒のよりよいキャリア発達を実現するための、貴重な示唆を与えていただきました。参会者の皆様もそのような協議会であったと願っています。

コミュニティスクールとなるであろうこれからの学校は、地域づくりの中核となることが期待されています。学校・家庭・地域・教育行政の連携を強固なものにして、次代を担う子どもたちの健やかな発達のために、研鑽を重ねる必要性を改めて確認できた研究大会でした。運営にあられた実行委員会の皆様、関わった全ての皆様に感謝申し上げます。

特集

## 同僚性を高める私の取組



## ONE TEAMに向けて

魚沼市小中学校教頭会

佐藤 孝 幸

(魚沼市立小出中学校)

チーム学校の推進に向けて、学校の教育力・組織力の向上が求められている。組織力の向上には、教職員の同僚性の構築は欠かせず、そのためには教職員同士の対話や話し合いが必要だと考えている。

今年度、新任教頭として魚沼市に赴任した。市では、市教育委員会・市教育振興会の協働事業として『温かい学級づくり支援事業』を行っており、教頭が校内の事業担当者に位置付けられている。具体的な実践として、Q U調査を各学期に全学級で行い、学級ごとの分析と事例検討会等を小集団で行った。その後、全教職員で改善策等の共通理解を図った。

市の事業だけでなく校内研修として、授業公開に向けた一人一実践に取り組んだ。研究主任や教務主任と連携して、小集団で互いの授業を参観できるような時間割の設定と、相互理解を深めるために学年や教科が異なるグループ編成を行った。そして、指導案検討等をできる限り設定して、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善に取り組んだ。

また、校内特別支援コーディネーターと連携して、通常学級における特別な教育的支援を必要とする生徒と支援内容を全教職員で確認した。さらに定期的に情報共有をして生徒の特性や困り感、対応の留意点を教職員同士で学び合い、より適切な指導につなげた。

より良い学級集団づくり、授業改善、特別な教育的支援を必要とする生徒への支援、という明確な目標に向かって、教職員が話し合いを重ね、協働していくことで、相互理解や信頼が生まれていくと考える。そうした教職員の高い同僚性が、生徒にも伝わり、生徒の安心感や学校全体の安定につながったと考えている。

ラグビー日本代表のチームスローガン「ONE TEAM (ワンチーム)」のように、教職員一人一人が力を発揮し、目標に向かって一丸となってやり遂げることができるように、話し合いや対話を重ね同僚性の高い学校組織の構築を目指していきたい。



## ONE TEAM

胎内市小中学校教頭会

小山 政 之

(胎内市立築地小学校)

昨年の流行語大賞「ワン・チーム」。昨年日本で開催されたラグビーW杯で史上初の決勝トーナメントに進出し、ベスト8に輝いた日本代表のチームコンセプトです。忘年会でも冒頭、この言葉が校長の挨拶で用いられました。職員が一丸となって協働しながら職務にあたってきたことへのねぎらいと今後その協働意識や同僚性を高めていこうとの話でした。以下に当校の様子を紹介します。

## 1 安心感のある職員室

仕事をする上で「分からないこと」「不安なこと」は必ずあります。そんな時は周囲に「聞く・相談する」しかありません。当校には、雰囲気盛り上げるムードメーカーや困難や不都合を笑話にするポジティブ職員が多数存在します。その雰囲気が職員同士の信頼と安心感を生み、気軽に相談できる環境が整っていると感じています。

## 2 自発的なOJT

当校は経験年数に開きがある職員構成です。学級経営や教科指導において、若手職員は「分からないことは聞く。」ベテラン職員は「困っていたらアドバイスする。」という意識が確立しています。こうした自発的なOJTが当校では機能していると考えています。

学校現場を支えてきた諸先輩方の多くが退職を迎え、若い力の育成が課題となっている昨今。今まで以上にこれからは組織の力を高める協働意識や同僚性が必要とされる時代です。当校は幸いにも校長のリーダーシップのもと、高い意識と力量を備えた教職員によって「ワン・チーム」が成り立っています。しかし教頭として何をしているかと問われると返答に窮します。教頭は職員室経営を担う立場です。現状にあぐらをかくことなく、能動的に働きかける手立てを研修し、ワン・チームの力を更に伸ばしていけるよう努めていきたいと考えています。

# 郡市教頭会ネットワーク



## 小規模の特性を 生かした教頭会

妙高市小中学校教頭会

会長 五十嵐 悟

(妙高市立新井小学校)

妙高市教頭会は、小学校8校、中学校3校、特別支援学校1校の12校で構成されている小規模な教頭会です。

本教頭会は、小規模ならではの特性を生かし、細かな情報交換とそれに基づく連携を大切にしています。

### 1 研修について

教頭会は小・中合同で行っています。今年度は、関東ブロック教頭会研究大会での発表に向けて研修を深めてきました。妙高市では、学校の枠を超え、多様な人間関係の中で様々な体験や協働的な学びを行う長期宿泊体験学習を行っています。今回の発表ではこの宿泊体験学習のカリキュラムデザインの在り方について取り上げました。検討を進める中で、体験学習の意義や教頭会としての主体的なかかわり方についてより深く考えるきっかけとなりました。

### 2 事務職員との研修

例年、夏季休業中に事務職員との合同研修を行っています。「学校預かり金未納者に対する対応」や「事務効率化のための対策」等、その年ごとに問題意識の高いものからテーマを選び、意見交換をしたり、講師を招聘したりして学んでいます。今年度は「共同実施から見える課題」をテーマに、小グループに分かれて意見交換を行いました。事務職員の本音から学校の課題が浮き彫りになることもあり、有意義な時間となっています。

### 3 上越市教頭会との連携

小規模のため、県の研究大会の開催は、隣の上越市教頭会と合同で担当させていただいています。住居が上越市の教頭も多いので、必要に応じてすぐ集まり打合せをすることが可能です。打合せの中で市を超えた教育課題や生徒指導上の留意点が見えてくることもあります。これからも様々なかかわりを大切にして、教頭会の質と力量を高めていきたいと思っています。



## 明日への活力となる 教頭会に

十日町市・中魚沼郡小・中教頭会

副会長 若井 義弘

(津南町立津南小学校)

本教頭会は、十日町市及び津南町の小学校21校、中学校11校、中等教育学校1校、計33校、33名で活動を行っています。令和元年度は、3分の1以上という、大勢の会員が入れ替わりました。

主な活動として、年に1回の総会を5月に、研修会を夏季と秋季の年2回行っています。

夏季研修会は、各研究大会等で発表予定の実践等を持ち寄り、内容を検討します。実践内容をより焦点化するとともに、仲間の実践から刺激を得ることができる貴重な場となっています。今年度は、児童生徒の社会性の育成に注目しながら、教頭の役割はいかにあるべきかについて、活発な議論がなされました。

十日町市・津南町に初めて勤務をするという方も少なからずいるため、秋季研修会では地域の施設や自然などを積極的に学ぶ活動を行っています。今年度は、理科教育センター専任所員の案内のもと、地域のプラネタリウム施設での見学・視聴と、清津峡溪谷トンネルの見学を行いました。

清津峡溪谷トンネルは、当地域で3年に1回行われる「大地の芸術祭」の作品の一つとして、現在はとても人気のあるスポットとなり、マスコミにも度々取り上げられています。

学校が地域コミュニティと繋がるためにも、管理職が地域に出向き、地域を知ることは不可欠です。この研修は、地域に学び続ける姿勢の必要性を改めて感じる場となっています。

また、研修の後は、交流を深める場を設け、情報共有、情報交換を行っています。共通の話題や悩みは議論が活発になり、それぞれが講じている策、とりわけ働き方改革への取組についての情報交換では、自然と熱が入ります。

今後も、各校教頭一人一人の明日への活力へと繋がり、子どもたち、教職員の元気へと繋がる教頭会を目指していきたいと考えています。

# 教育懇談会報告



## 令和元年度 教育懇談会の報告

新潟県小中学校教頭会

調査要請部長 **藤塚 静治**

(新潟市立江南小学校)

日時：令和2年1月21日（火）15：00～16：55

会場：じょいあす新潟会館

主催：新潟県小学校長会・新潟県中学校長会

### 1 教育委員会ごあいさつ

新潟市教育委員会教育次長 **高居 和夫 様**

○新学習指導要領の全面実施を迎える。確実な実施と共に教職員一人一人の日々の生活の充実が教育の充実につながる大切なこととなる。

○様々な教育課題に対して学校・保護者・地域との連携により少しずつ改善されていることに感謝申し上げる。

○公立学校の教師の勤務時間の上限に関するガイドラインをもとに、各市町村で上限の方針等を定める手続きを進めていただきたい。

### 2 研究協議

協議議題「『チーム学校』による学校運営の在り方」

話題提供①

長岡市立脇野町小学校 **吉井 純子 校長**

～「チーム性の高い学校」を目指して～

○地域を含めた全体で全児童を育てていること

- ・現PTAとOB組織を中心としたサポーター
- ・地域人材・教育施設等物的資源による支援

○教職員による学校課題解決

- ・学級担任による学級差を埋める学年合同授業・交換授業（教科担任制）の実施と級外職員・専科教員・教育補助員の補習等支援
- ・生徒指導対応の情報共有タイム（週1）と校内委員会の早期開催、関係機関との連携

○教育に関する地域への発信と提案、共に子どもを育てようと家庭への説明と理解促進、チーム対応のための教職員個々の目標・役割の明確化と寄り添いを校長として大切にしている。

話題提供②

長岡市立東北中学校 **鷲尾 哲郎 校長**

～学校組織マネジメントの具体的実践～

○具体的実践キーワード

「ピラミッド型組織」「フラット型組織」「マトリクス型組織」「自律型組織」

・どの型においても当該校のミッションを明確にした上で利点を生かしながら活用してきた。

○成果（実践上のポイント）

- ・ピラミッド型組織ではミドルリーダーの育成
- ・フラット型では職員の協働・合意形成が大切
- ・自律型では課題の明確化と核となるキーパーソンの存在、解決の方策（指導案等）の整備

○課題

- ・キーパーソンの育成と意欲の維持、チームの一員として協働する職員の意識の維持

### 3 指導講評

新潟県教育庁義務教育課長 **佐藤 理仁 様**

○「チーム学校」協議より

- ・地域人材等外部人材の効果的な活用
- ・ミドルリーダー育成のための研修体制構築を県として強化実施

○要望書については、県の危機的財政状況に満額回答はない。外部人材は勤務体系の工夫により多くの学校で活用できるようにしたい。

○非違行為の根絶には、①自分のことを良い人だと信じてくれる他者の存在②具体的目標への努力と実現を通して現状を大切にす思い③社会規範を守ることの誇りと周囲からの認知④一心不乱に打ち込める物事・趣味を一人一人が獲得することが大切である。

新潟市教育委員会学校人事課長 **池田 浩 様**

○これからの校長に求められていることは、「空間の広さ」と「時間軸」を持ち合わせることである。

○今後どのような外部人材が入ってくるのか。地域教育コーディネーター導入時の不安感は現在皆無となり当たり前の事業となっている。どこまで広げ、何を見るのかが大切である。

○一方、学校内部では職員の力量形成とともに柔軟な組織構造による対応が求められる。そのため、俯瞰して見るのが大切になる。

○併せて、校長として教育者としてこれまで培ってきた力量を今後どのように伝えていくのかも考えていただきたい。

# 随 想



## 随 想 ～今想う育った頃のこと～

長岡市立神田小学校

安原直規

街中で生まれたが親の事情で自然豊かな田舎で育った。田舎の何でも屋。酒たばこから、食料、生活雑貨まで何でも売っていた。公民館が隣で会合があると、二次会は我が家。タバコと酒で夜遅くまで賑やかだった。父親の趣味で裏に広い畑があった。野菜も果樹も育てた。池も掘って錦鯉の選別も蓮根掘りも手伝った。春は山菜採り、夏は魚採り、秋はキノコ採りに連れられて行った。晩御飯は家で採れた野菜と売れ残った品。祖母は梅干しを漬け、たくわんや白菜漬けを出した。

祖父母と母が引揚げ者で台湾や戦争の話をよく聞いた。長岡駅から長生橋が見えた。目の前の茅葺き屋根の本家には厩や囲炉裏があった。隧道からの水は冷たくスイカが美味しかった。従兄弟と蔵に入って宝探しをした。大勢の仲間と夕方遅くまで野球をして遊んだ。学校まで往復4キロ歩いた。道草して片栗の山に登り、沢蟹を捕まえ、桑苺を食べ、染み渡りをした。店の留守番では、通い帳の客と長い世間話。雪道に酒10本を背負子で運び配達した。夏は暑かったが自然の中で蛍や蝉、トンボを楽しんだ。雪が降り家族総出で雪下ろし。歴史博物館の雪壁横の商店が自分の育った家のようなのである。

受験勉強しながら深夜ラジオを聴いた。あこがれの東京へ出て学生生活を送った。バブル時代に仲間は民間に就職した。幸い教員採用試験に受かった。子供や人に対する愛情はあったがスキルはなく学び続けた。多くの先輩や仲間から支えてもらい教頭の仕事に就けた。そして理科を教えながら先生方や保護者・地域と共にある日々幸せを感じる。

経営の神様船井幸雄氏曰く「世の中で起きることはすべて、必要必然であり、ベストのことしか起こらないようになっている」。教員生活も終わる。今まで関わってきた人々に感謝。育った地域や自然は無いが、幼少頃に染みこんだ生活を夢見て、学んだことを若い人や地域に恩返しする生活を送りたい。



## PISAの結果を例に 考える

新潟市立五十嵐中学校

荒木良則

12月3日にPISA2018の結果が公表されました。これに伴う各報道は、「学力調査の順位下落(朝日新聞)」、「日本の15歳、読解力15位 3年前より大幅ダウン(産経新聞)」など、「PISAショック再び」のような論調が多かったようです。

しかし、私たちはもう少し冷静に「考え」ることが必要だと思います。例えば、比較対象や得点の有意差について、読解力を試す問題 ([https://www.nier.go.jp/kokusai/pisa/pdf/2018/04\\_example.pdf](https://www.nier.go.jp/kokusai/pisa/pdf/2018/04_example.pdf) 国立教育政策研究所のHPから検索可能) について、読解力に重点をおいたPISA2009との比較、最初のPISAショック(2003年)後の学習指導要領(2011年)で学んできた世代の結果として見た場合について、などです。また、現場レベルでは、わかりやすい授業を読解力を発揮しなくても理解できるようにすることと勘違いしていないか、またはわかった気にさせているだけではないかと振り返ることもできます。

このような話題1つでも、ネットで「見る」だけでなく、もっと「考え」たり、調べたり、学び合ったりすることができます。そして、私たちがそうならなければ目の前の子どもたちも主体的・対話的で深い学びをするようにはならないでしょう。

このような学びは、予測不可能な将来に向けて必要だと言われています。予測不可能とは、これまでと同じようにやっていたら間違いのないという時代ではないということです。もう少し、個人の立場を一旦おいて、より高い視点から客観的に、表面的な情報を捨てて本質を抽象的に「考え」、感情的にならない話し合いや学び合いを、私たちがしていくべきだと思います。幸いにも、多くのことを変えていくべきだと考える諸先輩方がたくさんいらっしゃいます。全国公立学校教頭会の歴史ある「学校運営」の休刊の判断もありました。慣例にとらわれることなく、本質を「考え」続け、思い切った変革であっても、それを提案していくべき時代なのだと思います。

新潟県小中学校教頭会

[事務局]

県教頭会ホームページ

全国公立教頭会ホームページ

〒950-0911 新潟市中央区笹口2丁目7-17 和田ビル2F

E-mail n-kyotoh@crest.ocn.ne.jp

<http://www.niigata-kyotokai.jp/>

<http://www.kyotokai.jp/>

TEL (025) 244-8225

FAX (025) 244-5060